



幕末の志士 高杉晋作

・辞世の句：「おもしろき こともなき世を おもしろく」

幕末長州に生まれる。明治維新の英雄。

20代半ばで、長州軍奇兵隊を創設し、倒幕の原動力となるが、まもなく結核に罹り、大政奉還を見ずしてこの世を去る（27歳没）。

都々逸「三千世界の烏を殺し、主と朝寝がしてみたい」は一般に晋作の作であると言われている（木戸孝允作の説も有り）。この都々逸は、現在でも萩の民謡である「男なら」や「ヨイショコショ節」の歌詞として唄われている。

顕彰碑には「動けば雷電の如く発すれば風雨の如し、衆目駭然、敢て正視する者なし。これ我が東行高杉君に非ずや…」とある。これは伊藤博文が高杉晋作を評した言葉である。

（出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』）